

## 分野番号 1 小学校 学習指導の部

### 一年生児童へのきめ細やかな配慮と丁寧な学習指導について

大淀町立大淀緑ヶ丘小学校 教諭 河崎 光美

#### 1 実践内容

小学校生活に期待と不安を抱いて入学してくる一年生児童の気持ちに配慮すると共に、細やか学習指導と保護者への細心の対応を心がけることを大切にしている。



##### (1) 生活ルールの指導

毎日、始業前に学級児童全員の連絡帳に目を通し、一人ひとりの健康面や・精神面などの情報をつかんでいる。また保護者に学校・学級・児童の様子をつぶさに知ってもらう為、学級通信を毎日発行する。一年生児童の保護者の方は我が子のことが心配で、子どもの学校での生活に不安を感じていることも少なくない。そこで、通信で現在の学習状況や学級の実態、子どもの成長や嬉しい気付きなどを細かく掲載している。

また、入学当初から学習の基礎となる鉛筆の持ち方・座り方・机の中の学習用具の置き方を徹底し、授業時間ごとに繰り返し声に出させて身に付けさせた。下校時には、身の回りの整頓がされているかを毎回確認し、児童自身に片付けの習慣を身に付けさせた。

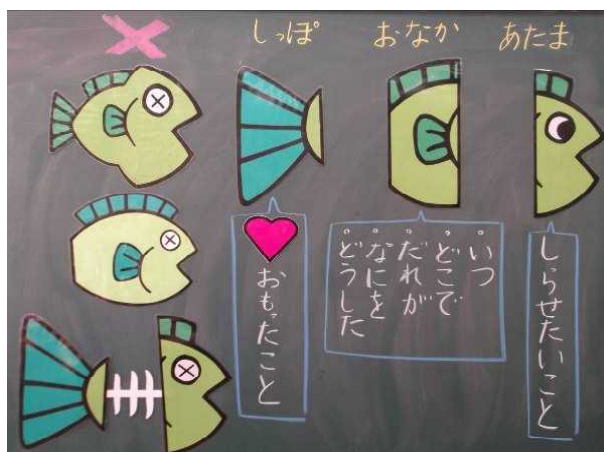
##### (2) 学習の指導

発表は、一日5回を学級のルールと定めているので、児童は毎日発表することを自然に受け入れていく。定められた話形を覚えさせることで、発表時の自信につながっている。

また「月の詩」を決めて、月毎の季節感を感じさせたり、音読練習をさせたり、暗唱発表に学習をつなげていくことで、発表の力を楽しみながら身に付けさせた。

復習では、算数科と国語科の授業前15分間をとり、「計算」や「読み書き」の反復学習を行い、既習の内容を定着させるよう努めた。例えば、聞き取りの力を養う為に、アニメーションを取り入れ、回数を重ねて力を付けさせている。

学習を楽しんで、また分かりやすく進める為に、教材を工夫し、視覚的に分かりやすく示している。例えば「作文」の学習では、作文をお魚に見立てて、頭（はじめ）お腹（中）しっぽ（おわり）で表し、段落の意味を理解しやすいように、教材に工夫を凝らした。頭は「しらせたいこと」、しっぽは「心で思った・感じたこと」を書く。一番たくさん書いてほしいお腹の部分は、



「いつ」「どこで」「だれが」「なにを」「どうした」の内容を必ず押さえて書くように指導した。学習前に、マス数の少ない作文用紙を用意し、反復学習を重ねた結果、文章づくりに抵抗をもつ児童が減り、楽しんで作文活動に取り組むようになった。また、失敗例として画像の左端にあるように、頭の部分が多すぎるような文章やしっぽやお腹の部分がないような文章が、おかしいと気付かせるために、児童に視覚的に分かりやすい教材を作成した。

また、読書を楽しんで習慣化するために「読書のれん」の活動をした。読書カードを三種類（日本のお話・外国のお話・図鑑）に色分けし、上から下へと貼っていった。児童は最初、のれんの長さを競うようにして読書を始めるが、続けることによって、多くの書物に触れる機会が増え、自然に本の中の世界に魅了され、読書の楽しさに気付くことができた。読書量が増えることで、言葉を多く知る機会が増え、作文力や表現力にもつながっていった。

上記のように、児童個々の学習内容を定期的に通信に載せたり、児童自身が授業中につくった問題を宿題として掲載し、友だちの書字や作問を見たり、自分のものと比べたりする中で学習意欲を高める効果もねらっている。保護者の方にも見て頂いて、家庭学習の支援を促す目的としている。

1年生では、生活科でアサガオの生長を学習するが、その時に併せてヒマワリも育てている。そのヒマワリを感謝のしるしとして、見守り隊の方へのプレゼントとして贈っている。春にはチューリップもプレゼントしている。贈るまでに、道徳の学習も兼ねて、登下校の安全を守ってくださっている地域の方々や、周りの大人の人への感謝の思いを高めていって、手紙と共に気持ちを贈るという心の学習をしている。自分たちの安全な生活が、たくさんの人々の支えの中で成り立っていることに気付き、感謝の心を養うことをねらいとしている。



## 2 成果及び課題

一年生という低年齢もあり、自分から思いを発せられない児童も多いので、児童に目を配り、毎日必ず一人一人と会話をもつことを大切にしてきた。些細なことであっても褒めたり励ましたりする声かけで、児童に安心感と認められているという自尊心をもたせることができると考える。

また、配慮が必要な児童の学習面・生活面への指導については、反復指導を繰り返し、日々の進退を文章に書き留め、児童の成長の手立てに役立てている。しかし、学校だけの取組だけでは難しいところもあるので、保護者との連携を密にし、保護者からの協力や支援を得られるような信頼関係をあわせて築いていくことも大切であると考えている。

## 分野番号 1 小学校 学習指導の部

### 子どもたちが主体的に活動できる音楽の授業について

五條市立野原小学校 教諭 城 早幸

#### 1 実践内容

母校であるこの学校に赴任したのは8年前。前任の音楽担当は歌唱指導に力を注いでおられた尊敬する恩師であった。その後の音楽専科を引き継ぐことは、私にとって、とてもプレッシャーであった。器楽肌の私は一般的な授業の中での歌唱指導や、当初から活動していた金管クラブの指導はやれるものの、野原小学校の歌唱レベルを落とすことにならないか不安であった。私は様々な研究会に参加したり書籍を読んだり、独自に思いついた方法を試したりしながら、野原小学校の音楽を進めていった。



##### (1) 日々の授業 「まず好き、そして得意に～好きこそ物の上手なれ！をモットーに」

4月当初は毎年どのクラスも担任が代わり、子どもたちが戸惑っている様子が音楽の授業の中で感じられる。そして5月6月と月日を重ねるごとに、前年度とはまた違う雰囲気や表情が見られる。楽しく音楽の活動をするためには何人グループでもすぐにつくれる、つまり誰とでもグループになれ、認め合えるクラスの空気、心の解放が不可欠である。そこでルーティンワークとして、体を使う発声のウォーミングアップ(腹筋体操・お口の体操アエイウエオアオ)やリズムステップ、グループ活動を取り入れたアクティブラーニングによる読譜練習などを導入した。答え合わせも音の高低を手の位置で表現したり発声するなどひと工夫した。さらに楽典や器楽を楽しく正しく身に付けるためにも様々な試みを積み重ねた。音楽が得意になる魔法のじゅもん・ドレミッション・ハンドサイン・発声のウォーミングアップ・楽器の苦手克服ポイント(目印の輪ゴム)などが主に実践したものである。(H24年6月の県音楽教育研究会前期大会やH28年7月・H29年7月の五條市教科等研究会音楽部会の研究授業で紹介)

また、一年間を通して毎日歌える『月ごとの歌』を選び、CDにまとめたものを各クラスに配布した。各担任の協力もあり、朝の会や帰りの会など毎日どこかの時間でクラス全員心を合わせて歌うという習慣を付けていくことができた。



##### (2) 伝統の第25回「野小コンサート」

野原小学校では毎年11月頃に校内音楽会を行っている。今年度も保護者や地域の方々をお招きして盛大に開催した。オープニングには全学年で手話をしながら歌う「ビリーブ」の全員合唱。1年生から6年生の学年ごとに歌あり、鍵盤ハーモニカまたはリコーダー奏あり、そして今年は1～3学年合同の器楽合奏にもチャレンジするなど、日々の音楽の授業で学習した成果を発表する様々なプログラムを構成した。また市内小中音楽会に参加した4・5年生合同の演奏、金管バンドクラブの演奏、先生達のサ

プライズ合唱を含め合計11の演目となった。4・5年生の合同演奏は、歌いだしにアカペラで「ハナミズキ」、そしてリコーダー奏へとつなぐ。2曲目「道化師のギャロップ」は5年生の鍵盤打楽器アンサンブル、そして4・5年生全員の器楽合奏は「やってみよう(ピクニック)」と「道化師のギャロップ」をパートナーソング風にアレンジして演奏した。高学年になると、ソロで歌ったりソプラノとアルトパートを一人ずつ二重唱で声を重ねたり、大勢の観客の前でも堂々と自分の声を響かせることに自信がついてきたようである。それを見て、中・低学年の子どもたちも「堂々と歌っていてカッコよかった。」「やわらかい声がきれいだった。」「私も一人で歌うことにチャレンジしてみたい。」など、新たな目標を見つけた様子である。このように、今年のコンサートでも子どもたちは日々の集大成としての演奏を発表することができた。

### (3) 金管バンドクラブ

本校には金管バンドクラブがあり、今年度は28名が在籍している。中でも5年生は女子全員が金管クラブのメンバーである。全校の割合からすれば4人に1人は金管バンドクラブ所属ということになる。昨年一昨年は、二年連続全国小学校管楽器合奏フェスティバル西日本大会に奈良県代表として参加演奏した。本年度はこの7月に地域の夏祭りイベントの機会をいただき、初演奏し、4月に楽器を手にしたばかりの新メンバーも堂々のデビューを果たした。また12月には全日本小学生金管バンド選手権（コンクール）に初チャレンジの予定である。子どもたちは部活で学んだ音楽に対する意識やルール、音楽的な知識も含めてたくさんの事を授業中や日々の生活の中で全校に広げてくれている。



## 2 成果及び課題

子どもたちは音楽の授業が終わり教室に戻る廊下で、また休み時間にきれいな歌声で習った歌を口ずさんだり、雨の日などはリコーダーで知っているメロディーを試して吹いたりするなど、音楽が身近なもので自然に触れられるものになってきた様子を感じる。この6月にはFM五條から番組のつながりに流すワンフレーズの歌声の収録依頼があり、子どもたちは得意気に歌声を響かせた。ただ単に、歌が上手になったとか楽器が演奏できるようになったとかだけではなく、心の中の思いや、わき出す気持ちを、顔や声や身体を使って音楽の中で表現させたいと思っている。学級担任はクラスを創る。1年生から6年生の全校児童と関わっていける私は、情緒的な面と直結する音楽という切り口から学校を変えていけると思っている。「歌うことが好き、楽器が得意、音楽っておもしろい、学校って楽しい！」と感じる子どもが一人でも多く増えていってほしい。そして、音楽に包まれた笑顔あふれる学校になってほしいというのが、私の願いであり目標でもある。

## 3 その他の参考となる事項

五條市立野原小学校Webページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/nosho/>

## 分野番号2 小学校 生徒指導の部

### 学校生活を支える生徒指導 ～体づくり・心づくりを通して～

生駒市立生駒南小学校 講師 金 秀勇

#### 1 実践内容

4年前（平成26年度）から本校の生徒指導主任を務めることとなった。児童の実態に目を向けると、「学習・生活・運動面で充実している児童」と「学習・生活・運動すべての面で課題を抱える児童」の二極化が進んでいるように感じた。後者は、幼少期の生活経験や愛着形成が不十分なまま成長し、学習や運動、人間関係など学校生活の様々な場面で課題を抱えているように思う。そこで、体・心を育てていくことを大きな課題と設定し、「体づくり」、「心づくり」を基盤とした生徒指導に組織的に取り組んだ。児童一人一人が自己肯定感を高められる指導を目指した。



##### (1) 体づくり

本校で平成24年度末より取り組んできた「G n P(ぐんぐんのびろプロジェクト)」について平成28年10月に全校児童アンケートを行い、これまで捉えにくかった取組の効果を検証し、評価、改善を行った。アンケート結果では、「集中力が増した」、「自分の体を意識するようになった」といった肯定的な意見が多く、これまでの取組が一定の効果をあげていることが分かった。

###### ① 今月の動き・南小たいそう・環境づくり

指先の器用さや体の軸を意識させて体を保持する運動を、月ごとに朝の会や毎授業の号令に取り入れたり、本校オリジナルの南小たいそうを作ったりして体幹を鍛える動きを生活に取り入れている。ケンパやストラックアウトの的、のぼり棒ドリルなどを校舎や中庭に設置し、毎年修繕と改良を行っている。

###### ② 南小ギネス

各学期ごとに走跳投のスポーツ大会を企画し、多くの児童が参加している。南小ギネス記録を設けて児童が意欲的に取り組めるように工夫している。

##### (2) 心づくり

学級集団の中で、「自分の思いを伝える」、「他の人を思いやる」、「ルールを守って行動する」ことを目標に、学校の様々な分野から心づくりに取り組んだ。清掃指導では、平成26年度から「3つの玉」を目標に継続して指導し、児童が主体的に掃除に取り組む姿勢が多く見られるようになった。また、あいさつ運動では、地域との連携や児童からのアイデアを生かして本校独自の取組を児童主体で進めることができた。

###### ① あいさつ運動・あいさつキャラクター

毎月第1火曜に行われる地域の方々によるあいさつ運動「あいさつタウンいこま」に合わせて校内のあいさつ運動を行った。登校中に地域の方々と、校内では仲間と気持ちよくあいさつできる経験の場として活用した。また、児童主体で考案したあいさつ運動を企画し、毎年新しいキャラクターを



決めて休み時間のあいさつ運動や啓発劇を開いている。

② 無音清掃「3つの玉」

がまん玉、みつけ玉、しんせつ玉の3つの玉をみがくことを清掃の目標とした。低中高学年でそれぞれ重点となる玉を決めて、清掃を通して自分の心を伸ばせるよう指導した。

③ なかまづくり指導の共通理解

南小ギネスや縦割り活動をなかまづくりの場として教職員で共通理解を図っている。活動を通して起こる人間関係の課題を人間形成の場として捉え、「トラブルが起こることが当たり前」という基本姿勢で教職員が指導に当たった。

(3) 生徒指導担当の役割

平成28年度に危機管理能力向上研修を受講し、本校においても組織対応や関係機関との連携の重要性を感じ、改善を試みた。定例の部会での情報交換や、個人カードの全児童記入、ケース会議の充実など、児童理解や配慮児童の報告の場を保障し、教職員間の共通理解を深めることに力を入れた。

① 定例部会の充実

これまで学期に2回行っていた児童の実態把握の部会を毎月開催とした。配慮児童の連絡や活動の見直し、指導内容の共通理解をより図れるようになった。

② 個人カードの活用

配慮を要する児童に記入していた個人カード（平成25年度より）を平成28年度から全児童対象に記入するように変更を行った。欠席や遅刻の数を記入するように変更し、不登校傾向の児童を次年度の学年にうまく接続できるように改善した。

③ ケース会議の充実

各学年から低中高の生徒指導部員、主任そして管理職へと連絡体制を確立し、必要な時に小規模のケース会議を迅速に開くことができるように改善した。従来のケース会議だけでなく、少人数で開く簡易版ケース会議も活用し、指導内容の共有と情報の共通理解を狙った。

2 成果及び課題

11月に行う児童のアンケートでは、毎年多くの児童が学級の中で学習やなかまづくりを肯定的に捉えている結果が出ている。これは児童の自己肯定感を第一に考え、児童の心身を伸ばしていく支援体制が学校全体で共通理解されていることの成果だと考える。また、全校体制で取組を進めることで、他学年の児童理解や情報共有が深められる利点もあった。生徒指導部も共有した情報を基に迅速な対応ができていると感じている。学校生活の全ての場面が生徒指導であり、人間形成の場であることを意識し、教職員間の児童理解を共有できるようなよりよい生徒指導体制を更に進めていきたい。

3 その他参考となる事項

生駒市立生駒南小学校Webページ

[http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/netcm/?page\\_id=311](http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/netcm/?page_id=311)

奈良県教育委員会 平成28年度「学校における危機管理能力向上研修」関係リンク集

<http://www.pref.nara.jp/secure/175035/H29mokujilinklock.xls>

## 分野番号3 小学校 学校体育の部

### どの子ども夢中になる体育学習による体力向上の取組について

橿原市立晩成小学校 教諭 吉田 英貴

#### 1 実践内容

子どもたちを取り巻く生活環境の変化に伴い、子どもたちが運動する機会の減少や体力・運動能力の低下が危惧されている今、学校体育のもつ役割は非常に大きいと考える。

私自身が実際に体育授業を行う中で、どの子ども夢中になって取り組む体育授業を創造し続けていくことはもちろん、近年急増している校内外の若手教職員に、小学校6年間の系統性を大切にした年間指導計画に基づく体育科の授業づくりを広めていきたいと考え、取り組んできた。



##### (1) 授業実践について

体育の授業づくりを学級づくりの大きな柱と捉え、実践を重ねている。長年研究を進めているゲーム・ボール運動の領域では、既存のルールに児童を合わせて活動させるのではなく、児童の実態や身に付けさせたい力を明確にし、それを基にルールを工夫して活動していくという考えを大切に授業づくりを進めている。そうすることにより、どの子にも活躍のチャンスがあり、「がんばってみたい」という意欲を高め、共に学び、高めあう体育授業の創造に努めている。



##### (2) 校内研修について

ここ数年、校内研修として年に数回、体育科の授業づくり及び体力向上に関わる研修会を実施している。様々な授業を見せていただいたり、研修会に参加させていただいたりした中で研鑽を積んだ内容を校内の教職員に発信している。

##### (3) 対外的な活動について

###### ① 市・県の小学校体育研究会での実践発表・授業研究・実技研修会講師

一人一人が体と心をしっかり動かすことを目指して取り組んだボール運動ゴール型「タグラグビー」の授業公開及び実践発表を行った。

また、市内の若手教職員を対象に水泳やゲーム・ボール運動（ゴール型、ネット型）の授業づくりについての実技研修会を実施した。

###### ② 子どもの体力向上指導者養成研修（中部ブロック）への参加

独立行政法人教員研修センター主催の研修会（4日間）に参加し、陸上運動領域

の研修を受けた。その後県内の教員対象の伝達講習会の講師を2度務め、陸上運動の授業づくりについて研鑽を積んだ内容を広めていった。

### ③ 保健体育課の体力向上推進コーディネーター

平成26年度に県立教育研究所に勤務し、県内の小学校・幼稚園を訪問して多くの出張授業や職員研修、講座、実技研修会を実施する中で、多くの研鑽を積む機会を得た。

また、幼児を対象とした「子どもを夢中にさせる運動遊びプログラム」作成に携わらせていただき、運動機能が急速に発達する幼児期・児童期の運動遊びについて研究する機会を得た。



## 2 成果及び課題

どの子どもも夢中になる体育の授業づくりを目指し、実践を重ねていく中で、子どもたちが授業終了後に体から湯気を立ち上らせ、授業の感想や友だちのがんばり、自分が新たにできるようになったことを意気揚々と話してくれる機会が多くなっている。体育科の授業の中で、様々な運動に触れ、運動量を増やし、夢中になって運動に取り組むことは体力向上に直結していくと考える。

近年継続的に行っている校内研修会後には、多くの教職員から質問や相談を受けており、共により充実した体育科の授業をつくっていけるよう努めている。小学校6年間の系統性を大切にしたい体育科の授業づくりを学校全体として目指していくという雰囲気の高まりが見られる。

しかし、子どもたちが今後、生涯にわたり運動に親しむことができる資質が身に付いているのかという点については、引き続き検証を重ねていく必要がある。

体力向上推進コーディネーター・奈良県教育委員会指導委員（体育）という貴重な経験をいかして今後も更に研修・研鑽を積み、様々な場面で伝え、自らの教育実践に返していきたいと考えている。

## 3 その他参考となる事項

県立教育研究所Webページ なら“先生の蔵”～授業のための教材・教具集～  
<http://www.nps.ed.jp/nara-c/gakushi/kura/>



## 分野番号5 小学校 学校体育の部

### 児童が運動に親しみ、友だちと豊かに関わる体育授業の創造を目指した取組

檀原市立香久山小学校 教諭 米川 奈緒

#### 1 実践内容

近年、本校の児童を取り巻く生活環境が変化してきている。校区内の全ての公園で、ボールの使用が禁止になったり、空き地で遊ぶことができなくなったりし、児童が思い切って楽しんで遊べる環境がなくなりつつあることが一例として挙げられる。小学生の時期に様々な遊びを通して運動感覚を身に付ける必要があるが、その環境が整っていないことが懸念される。



本県では、全国体力・運動能力、運動習慣等調査及び奈良県児童生徒の体力テスト調査の結果、体力の低下傾向に歯止めがかかり、改善は見られるものの課題が残る。そこで、体力向上や運動習慣の確立を目指した取組、体育学習の指導方法等の工夫・改善について研究を深めるとともに教員の指導力向上を図るため、体力向上推進コーディネーターが設置されることになり、その任を受けて体育科について改めて学ぶ機会を得ることになった。

コーディネーターとして各校を訪問すると、発達段階に応じてどのような力を付けたらよいか悩んでいたりと、教具に限られているため効果的に授業を展開できず困っていたりする現状があった。自分自身も同じような経験をしたことがあり、少しでも力になりたいと思い支援に当たった。

##### (1) 授業支援

まず、学級担任と一緒に、各校の年間指導計画に沿ってきちんと指導できているか確認し、具体的な指導内容についても考えた。そしてそれをもとに、児童の実態を踏まえた単元計画の立て方、ねらいを明確にした授業の進め方を提案した。特に、運動が苦手な児童も楽しんで活動できるための手立てや安心して取り組めるスモールステップの場作りの大切さを伝えることに努めた。

実際の授業では、チームティーチングの形態で支援した。まず、T1として、授業を通して、基本的な授業の進め方や限られた時間内で児童の運動量を確保するための工夫、単元や授業構成の視点を伝えた。授業では、次時以降も継続して取り入れてもらえるように、なるべく訪問校の教具を使用した。また、状況に応じて手作りのものを持参して紹介したり、訪問校にあるものを利用して一緒に作ったりもした。T2としての支援は、技能習得のための指導法のほか、視点を与えたペアやグループでの学習方法を提案し、児童のつながりを育むための実践のサポートを心がけた。また、授業後に振り返りを行い、次時以降のよりよい授業展開のための協議を重ねた。

さらに、資料提供や放課後のミニ研修、夏期休業や冬期休業中の職員実技研修会を通して、体育科への理解が一層深まるよう努めた。また、児童が夢中になって運動し、友だちとの豊かな関わりの中での技能習得を目指した研究授業に関わり、単元を通して授業の進め方を支援する機会にも恵まれた。

##### (2) 体育主任への支援

訪問校の体力テストの結果分析を主任とともに行って課題を共有し、次年度の取組に向けた提案と資料提供を行うことで、体力テストの意義と結果の有効活用についての理解を図った。また、系統立てた年間指導計画への見直しと確実な実施に向けて協議した。そして、各校の主任がリーダーシップの必要性を自覚し、授業の活性化や課題に応じた取組等を推進できるようサポートした。さらに、体育倉庫の片付けや児童の動線に沿った体育用具の配置への見直しに関する提案を行い、学校全体でスムーズな授業展開への改善が図られるように助言した。

また、授業は日々進んでいくものであるため、訪問日以外にも困っていることや悩んでいることを相談、解決できるようできるだけ頻繁に連絡を取り合うようにした。その中で、必要に応じて他校の取組を紹介し、市内のネットワーク作りにも心がけた。

### (3) 体育的課題に応じた本校での取組

本校は、運動好きな児童が多いものの、休み時間の遊び方に偏りが見られる。そこで、今年度より校時を変更し、業前体育である朝のスポーツタイム（朝スポ）を設けた。朝スポでは、児童が水曜日に自由遊びを楽しみ、それ以外の曜日は、縦割り班（フレンド班）で数種類の運動遊びメニューに取り組む。児童の興味や体力的課題に応じた運動遊びメニューを毎日ローテーションするよう計画した。朝スポでは児童の運動遊びの多様化・日常化を図ると同時に、課題である投能力や腕支持感覚、逆さ感覚、回転感覚を育むこともねらっている。朝スポで楽しみながら継続的に取り組ませ、体育授業だけでは十分に育むことが難しいそれらの能力を身に付けられるようにしている。また、以前に樫原市の事業で行ったミズノのキッズヘキサスロンの用具を使用した低学年授業をミズノと協力して実践した。ミズノの健康運動指導士と相談しながら単元計画を立てることで、本校にある教具の多様な活用法を知ることができた。



## 2 成果及び課題

コーディネーターとして微力ながら最も大切にすることは、教員も児童も体育が好き、楽しいと実感できるようにすることであった。児童が無理なく楽しみながら「できた」を実感できる授業の展開を通して、教員も自信と意欲を向上させることができたのではないかと感じている。また、授業後の振り返りで、ねらいを明確にした授業の展開と工夫について学級担任と協議を行うことで、教材への理解が一層深まりその後の授業展開に反映させることができた。そして、各校の体育主任と年間指導計画の見直しや確実な積み上げの必要性について協議し、体力的課題に応じたより効果的で実効性のある年間指導計画の作成につなげることができた。

本校においては、学校便りで児童の実態や運動への関心をもってもらえるように家庭へ啓発することを通して、保護者が遊具の増設に尽力してくださる機会にも恵まれた。また、休み時間に固定施設を使って遊ぶ児童が増えたり、遊びの種類が多様化したりしつつある。各校における授業や体育主任への支援と本校での取組を通して、一緒に学び支援する以上に、自分自身が多くのことを教わることができ、貴重な研究の機会となった。この経験を生かし、今後もより一層自己研鑽に励みたい。



## 分野番号3 小学校 学校体育の部

主体的・対話的な学びを通した体力向上の取組～運動・外遊びの日常化を目指して～

香芝市立志都美小学校 教諭 澤田 善広

### 1 実践内容

体力低下への歯止めがかかってきているが、体力の二極化が進んだり昭和60年代と比べると依然低い水準であったりすることが課題となっている。児童の体力向上は、「運動を楽しむ」気持ちが満たされてこそ、意欲的に取り組むことができると考える。そこで、児童どうしの関わりや集団の高まりを意識し、主体的・対話的な学びを通して体力を高めさせたいと考えた。主体的な学びでは、運動の楽しさや喜びを見つけ、自分の課題や体力向上の必要性を理解するとともに、課題解決に向けて取り組むことを、対話的な学びでは、課題解決に向けて、助け合ったり教え合ったりしながら仲間と豊かに関わる協働的な活動を重視したいと考えた。



また、児童の体力を向上させるためには様々な環境を整えることが必要であると考え、学校全体で「運動・外遊びの日常化」をキーワードに取り組んだ。

#### (1) 「体力向上大作戦！」主体的・対話的な学びを通した授業作り

##### ① 体力向上の必要性を理解させる工夫

体力の必要性を理解させるため、まず体力テストの種目を体の柔らかさを高めるための運動（ストレッチコース）、巧みな動きを高めるための運動（テクニックコース）、力強い動きを高めるための運動（パワーアップコース）と動きを持続する能力を高めるための運動（スタミナコース）の4つに分類した。運動と体力要素の関わりを指導するとともに、1学期に行った体力テストの結果を児童自身に分析させ、その中から身に付けたい体力や自分の課題を設定させた。体力向上の必要性を理解させるとともに、個々の課題を持って主体的に取り組ませることとした。

##### ② 仲間と関わりながら課題解決を図る工夫

動きを持続する運動に対して、「しんどい」というイメージをもっている児童が多い反面、アンケート調査では多くの児童が、身に付けたい体力として挙げた。

また、体力テストでは長座体前屈と握力が男女ともに県平均を下回っており、本校の課題にもなっている。小学校高学年という発達段階を考慮し、動きを持続する能力を高めるための運動と体の柔らかさを高める運動の二つを学級全体の共通課題とした。単調なトレーニングにならないように共通の課題を設定し、学級全体やグループ単位で活動することで仲間と関わり合いながら楽しんで運動したり、友だちの良さにも気付いたりできるようにしたいと考えた。

##### ③ 課題解決に向けた運動の行い方を発展させる活動の工夫

個々の体力や課題に応じて運動の負荷や動きに変化をもたせたり、得点化するなどゲーム的要素を取り入れたりして楽しみながら活動する中で体力の向上につなげていった。「回数・時間・距離・姿勢・方向」など動きに変化をつける条件を話し

合ったり教え合ったりしながら、課題解決できるように発展的な行いや動きをグループで工夫させた。

## (2) 「運動・外遊びの日常化」を図るための取組

### ① 家庭啓発のための学校体育通信の発行

体力を向上させるためには、家庭の協力が必要不可欠である。学校と家庭が両輪となって、体力向上できるよう「しずみっ子体育通信」を発行し、学校での取組の様子や課題について知らせた。

### ② 志都美パワーアップタイムの推進

基礎体力の向上を図るために、体育科の授業開始5～10分を「パワーアップタイム」と設定し全校で取り組んだ。体育科の指導や運動が苦手な教員にも取り組みやすいように、より具体的に運動内容を紹介し、資料を提示した。

### ③ 運動委員会による遊びの紹介

外に出て体を動かすきっかけ作りになるよう、運動委員会から遊びの紹介を行ってきた。準備物が少なく、手軽にできる遊びを運動委員会から紹介することで、縦割り遊びの中でも紹介された遊びを活用する姿が見られた。

### ④ 「校内しずみんチャレンジ大会」の実施

運動の楽しさを体感し、記録に挑戦したり仲間と関わりながら運動したりすることができるようにチャレンジ大会を実施した。全校で取り組むことで、異学年の交流にもなった。



## 2 成果と課題

「体力向上大作戦！」の取組後のアンケートでは、「みんなと一緒に活動することは好きではない・全く好きではない」と答えた児童が12.5%から0%になった。友だちと一緒に運動したり、運動を工夫したりする活動を通じて、友だちの良さや仲間と協働的に活動することの良さにも気付くことができたと考える。健康を保持増進するために児童自身に体力向上の必要性を理解させることは、必要不可欠である。知識の理解をもとに運動の技能を身に付け、その上で一層の理解を深めるなど、知識と技能を関連させて学習することが大切である。今後は小学生の発達段階に応じて、体の柔らかさや巧みな動きを中心に取り組んでいきたい。さらに、1年間を通した長期的な学習過程の中で、運動について課題を発見し、その解決に向けて繰り返し取り組み、試行錯誤を重ねながら更に思考を深めていく「深い学び」へとつなげられるようにしたい。児童は、体を動かしたり遊んだりすることが好きであるが、運動や遊びのきっかけ作りをしないと積極的に運動に取り組めないことがあると感じた。場や時間、道具などの環境作りも必要であると考えた。体力の向上は、結果としてすぐに数値に表れるものではないが、生涯にわたる運動に対する意欲や態度を育成できるよう「運動の日常化」を目指して、更なる取組を継続的に進めていきたい。

## 分類番号 5 小学校 特別支援教育の部

### インクルーシブ教育の推進のための特別支援教育体制の充実

宇陀市立榛原小学校 教諭 高木 範子

#### 1 実践内容

通級指導教室が設置されて7年目を迎える本校では、インクルーシブ教育の観点から平成25年度より3年間「ユニバーサルデザインの授業づくり」を研究主題として校内研究に取り組んだ。通級担当3年目を迎え、個別指導で児童の発達を促すとともに、日常的な学習環境を整えることの大切さを日々感じながら取り組んできた。また、校内では特別支援教育コーディネーターとして、宇陀市内では地域の特別支援教育のセンター的役割として、校内の支援体制づくりや理解啓発に努めてきた。



##### (1) 校内支援体制の充実

口頭での連絡や共通理解では、支援の継続が難しいと考え、いくつかの簡易なシートを提案して担任の経験や力量に左右されない体制づくりに取り組んだ。

###### ① 「支援シート」の活用

以前は、実態把握と共通理解を進める際、口頭での報告になりがちのため、共通した記録が残らず、学年が上がると支援が継続できていないことがあった。そこで、平成26年度より「児童実態把握シート」を作成し、通常の学級で支援や配慮を要する児童の共通理解に努めてきた。児童の様子と手立てを記入したものを、学級ごとにファイルにまとめ、学年部会で共通理解するとともに、特別支援教育支援員（非常勤）への情報提供にも利用している。さらに、通常の学級に在籍し通級指導を受けている児童については、「個別の指導計画」を作成し、目標も記入している。この「個別の指導計画」は、特別支援学級や通級指導教室での自立活動などの学習活動を計画することだけを目的とするのではなく、通級指導教室での見立てや指導、学級の中で生かされること、指導の一貫性をねらったものでもある。そのため、担任が負担なく書き込めるような様式にした。

###### ② 「ケース会議：個別支援計画シート」の活用

特別支援教育部と生徒指導部の代表者がともに教育相談のコーディネートをしている。通級指導教室に通う児童に関して、保護者と目標をそろえる必要を感じるケースが複数あり、平成28年度には保護者も参加するケース会議を行った。会議の目的に合わせた書式（滋賀県教育委員会作成の「ケース会議：個別支援計画シート」を改編）を作成し、短期目標を明確化して取り組んだ。

###### ③ 「榛原小学校ユニバーサルデザインプラン」シートの活用

児童に対してユニバーサルデザインの授業を行なうのは、全ての児童に「わかった、できた。」を味わわせたいためであり、そのためには、経験に左右されずに全ての教員が足並みをそろえた実践をできるようにしたいと考えた。そこで、平成27年度に参加していた奈良県立教育研究所プロジェクト研究の中で、「榛原小学校ユニバーサルデザインプラン」というシートを考案した。ユニバーサルデザインの授

業については実践事例や書籍等で情報を得ることができるが、その具体的な手法は児童の実態に合っていないと効果を得られない。また、その支援が有効であったと判断するためには、授業のねらいが達成されているかどうかが大変重要であり、単に正解が導かれただけでは有効と判断できない。そこで、本時の「付けたい力」を明確にし、具体的な「目指す子ども像」を考えることで、有効な手立てを見付けることができる考えた。さらに、評価場面と評価方法も明確になるように記入欄を設けた。

榛原小学校 ユニバーサルデザインプラン

シート3

目指すユニバーサルな授業は、  
な授業である。

工夫

取組みの柱

1	教科			
2	単元			
3	付けたい力			
4	目指す子ども像			
5	詳細	場面	方法	
		タイプA	タイプB	タイプC
6	児童の傾向			
	手立て			

## (2) 発達障害への理解・啓発

### ① 校内研修

平成23年度より自閉症に関する校内研修を行ったのをはじめとして、発達障害児への理解や指導方法の啓発・研修を行ってきた。特に、発達障害の原因の一つに感覚の違いがあることや、疑似体験を通して児童の「困り感」を伝えることに重点を置き、学習環境を整えることの必要性を伝えるようにしてきた。

### ② 宇陀市のセンター的機能

他校通級している児童も多いことから、担任者連絡会を定期的に行い、通級指導に関する理解・啓発を行っている。また、宇陀市教育センター研修やコーディネーター研修にプログラムの提供やグループ討議の助言等の協力を行っている。

## 2 成果及び課題

障害のある児童・生徒が「特別」でなく「当たり前」に自分に合った教育を受ける事ができる教育がインクルーシブ教育であると考えている。しかし、各教員の意識の差からそれが保障されないこともあるのが現状ともいえる。本校においては7年間の継続的な研修や取組が成果として現れつつある。

### (1) 校内支援体制の充実

各種のシートの活用を行うことで、進級して担任が替わったり、担任以外の教員が対応したりする場合でも、一貫した指導・支援を行うことができるようになってきた。そのことにより、児童の学習意欲の向上や不適応行動の改善ができてきている。

### (2) 理解・啓発及び継続した研修

校内においては、継続的な研修の成果として発達障害の児童を捉える視点をもった教員が増えているが、人事異動があれば改めて研修が必要になる。意識を統一するための研修は全体で行い、具体的な対応方法については学年による部会毎の研修にすることで、より主体的・実践的な教育になると考える。

校外においても、特別支援教育担当の交替は常にあるので同様の課題があり、個別ケースの相談を通しての理解はもちろんのこと、特別支援教育担当だけでなく市内全体の教員の意識改革を行うような継続した研修や各校での取組が必要と考える。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立教育研究所 平成27年度研究集録 プロジェクト研究6 特別支援教育  
宇陀市立榛原小学校Webページ <http://www.haibara-e.ed.city.uda.nara.jp/>

## 分類番号 5 小学校 特別支援教育の部

### 特別支援教育における校内体制の充実に向けて

#### 特別支援教育コーディネーター・特別支援学級担任としての取組

檀原市立白檀北小学校 教諭 上田 知華

## 1 実践内容

特別支援学級担任として8年間、また、そのうちの3年間を校内の特別支援教育コーディネーターとして特別支援教育に携わる中で、本校の特別支援教育の支援体制の充実に向けて取り組んできた。



### (1) 特別支援教育コーディネーターとしての取組

- ① 校内の支援体制の充実に向けて、毎年、年度初めに特別支援教育部で、特別支援教育推進計画を作成し、全教職員がチームとなり支援をするという意識を大切にしてきました。特別支援教育は、特別支援学級担任だけでなく、全教職員が共通理解しながら、全ての児童に対して分かりやすい授業づくりやお互いを理解し合える学級づくりに取り組むことが大切であると考えます。個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成に当たっては、児童の特性に応じたきめ細やかな支援が行えるよう、特別支援教育コーディネーターとして、担任と積極的に連携を取っている。普段から気軽に話しやすい雰囲気作りを大切にしながら、教職員間で児童についての情報交換を行うことで、校内の支援が必要な児童の実態把握に努めている。檀原市では、4年前から共通した個別の教育支援計画を作成しているが、まだ作成することに慣れていない教職員も多い。そこで、自らも研修を重ねながら、記載の仕方や保護者との連携のとり方、活用の仕方などを全体に周知できるようアドバイスしている。また、専門機関からも児童の指導に当たって適切な助言を得られるよう相談の日程を調整するなど、連携を図っている。

### ② 途切れない支援のために

効果的な支援が途切れないためには、積み重ねてきた児童への支援方法や保護者の願いなどを確実に次に引き継いでいくことが大切だと考える。次の担任に引き継いで活用できる個別の教育支援計画や指導計画を作成するために、児童の困り感に対する有効な手立てが具体的に示されているよう心がけている。また、校内で定期的に支援委員会を開くなど、児童の短期目標や支援の手立てについて協議し、共通理解をもつ機会を大切にしている。さらに、新1年生として入学してくる園児や中学校へ進学する児童については、より丁寧な引き継ぎをすることで、本人や保護者の不安を減らすことができると考える。特別支援教育コーディネーターとして、校内の相談の窓口となりながら、学校や保護者と連携し、具体的な手立てをしっかりと引き継ぐようにしてきた。

### (2) 特別支援学級担任としての取組

#### ① 児童一人一人に合った教材と環境づくり

児童の発達段階に合わせた授業づくりには、楽しみ



ながら学ぶ教材づくりと安心して過ごせる環境づくりが大切であると考え。そこで、児童の社会的な自立に向けて、コミュニケーション力を高める学習と体づくりの学習には力を入れて取り組んできた。自分の思いを上手く伝えることができない児童には、言葉を絵や文字で視覚的に捉えられるように工夫した。絵カードや言葉カードを合わせるというゲーム感覚の学習は、児童にとって分かりやすく、楽しみながら取り組むことができた。学習が分かることで児童が自信をもち、「次は、こんな学習がやりたい。」という意欲を高めることにつながった。児童が興味をもてることをうまく学習活動に取り入れ、力を伸ばせるように工夫している。

生活の基盤となる体づくりにも、教室の中にトレーニングコーナーを設け、短い時間で毎日取り組める環境を作っている。サーキットやバランスボール、トランポリンなどを取り入れて体幹やバランス感覚、柔軟性を高めている。今年度は、子ども向けに作られたヨガに取り組むことで、ゆったりした音楽で心を落ち着けながらのびのびと体を動かす姿が見られている。



さらに、児童がリラックスしながら、自分のやりたいことをできるスペースを教室の一角に作った。自由な時間を過ごすことで気持ちを安定させ、次の学習への意欲を高めることにつながっている。

さらに、児童がリラックスしながら、自分のやりたいことをできるスペースを教室の一角に作った。自由な時間を過ごすことで気持ちを安定させ、次の学習への意欲を高めることにつながっている。

## ② 保護者との協力の大切さ

児童への効果的な支援のためには、保護者との協力関係が不可欠であると考え。本校では、特別支援学級児童の保護者と担任間で、毎日、連絡ノートを交換し、学校での支援の方法や児童の様子を知らせている。学校の支援の内容を保護者に知らせることで、家庭でも同じ方法を取り入れてもらったり、家庭での関わり方を知らせてもらったりしながら支援に生かすことができています。様々な場面での保護者との対話により児童理解が深まり、支援の方向性が徐々に形になり、適切な支援へとつながってきた。そして、私たちが児童の一番の理解者である保護者に学ぶという姿勢を大切にすることで、保護者との信頼関係を構築することができた。傾聴・共感・受容を心がけながら保護者の話を聞くことを通して、学校や児童に対する思いを引き出し、支援の方法について合意形成ができるよう日々取り組んでいる。

## 2 成果及び課題

私自身の取組は、日々の些細な積み重ねであり、目新しいものではないが、いろいろな児童や保護者と出会った経験を生かしつつ、本校の特別支援教育コーディネーターとして全体の連絡・調整の役割を果たせるように心がけてきた。児童一人一人によって教育のニーズが異なるため、経験が生かせなかったこともたくさんあったが、児童の実態をしっかりと捉えることや保護者と連携することの重要性に気付くことができた。そして、児童のがんばりから私も力をもらい、児童が「できた！」と目を輝かせて喜ぶ瞬間が、私にとっても一番の喜びであった。これからも、児童が笑顔で充実した学校生活を送るために、一人一人に合った教材作りや途切れない支援のための確実な引き継ぎに一層力を入れて取り組んでいきたい。



分野番号 9 小学校 学校教育目標の具体化の部  
カリキュラム・マネジメントを取り入れた学校改善

五條市立阿太小学校 教諭 西出 晃彰

1 実践内容

本校は小規模小学校で、児童は比較的穏やかで落ち着いている。学校運営や学級経営も比較的円滑に行われており、そのためか、学校全体への教員の課題意識は低いように感じられた。教員に対して意識調査をおこなっても、学校全体の児童の課題に対しての共通認識が持たれていないことが分かった。また、全学年単学級であり、個業的な傾向が強く、教員間の協働性は低いということも意識調査の結果からうかがえた。そこで、現状の課題を解決し、よりよい児童の成長を促し、学校文化の醸成を図るべく、カリキュラム・マネジメントを取り入れた学校改善に取り組むことにした。



(1) 学校課題の把握と重点目標の設定

児童の実態を知・徳・体の分野で強みと弱みを出し合い、その中から共通する項目を挙げて児童の課題生成を行った。その結果、児童の課題は、「自主性・主体性に関すること」、「自尊感情に関すること」であり、それらを高める取組が求められるのではないかと、という結論に至った。課題生成から、重点目標の設定に至っては、さらに課題を絞り込むことが必要であると考え、話し合いを進めた。そして、「当番活動はできるが係活動は苦手」という共通する具体的な姿が浮かび上がり、「自主性はあるが主体性が低い」という結論に至った。さらに、自尊感情に関しては児童の主体性を育む活動を通して自尊感情に働きかけることとし、重点目標を「主体性を育む」と設定した。

(2) 教育活動の構想と実施

重点目標が「主体性を育む」と決定し、全ての教育活動で実施することとなったが、その核となる教育活動の場として、運動会を選定した。その理由は、全教員・全児童・地域保護者が参加する学校を代表する行事であり、いわば学校を表

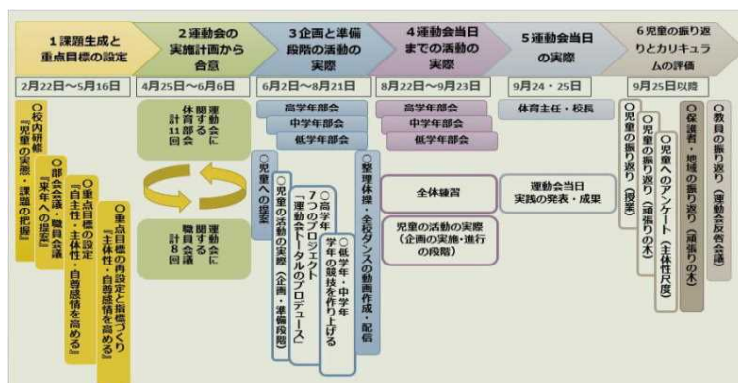


図1 運動会に関する一連のカリキュラム

していると考えたこと、また本校の運動会自体が、児童数の減少によって、内容などの変更が急務であり、マイナーチェンジは最低限しなければならないという必要性に迫られていたことからである。以下が運動会のカリキュラムの計画・実施の流れ(図1)である。

- ① 体育部会・職員会議での運動会の実施計画及びカリキュラムの検討から合意
- ② カリキュラムの実施(運動会に関する様々な企画と運営を、児童自ら行うこと

を通して主体性を育むカリキュラムの実施『児童が創り上げる運動会《プロジェクト型学習》』)

③ 児童の振り返りとカリキュラムの評価

(3) 教育成果の評価と改善（教育活動面における成果《児童の成長》）

全校児童を対象に主体性測定尺度を運動会実施前の6月と運動会後の10月に測定した。その結果、全学年の全項目において上昇する結果を得た（図2）。また、児童の具体的な発言や行動、「運動会がんばりの木」への記述などの質的データからも、主体性を育むという重点目標の具現化が確認できた。

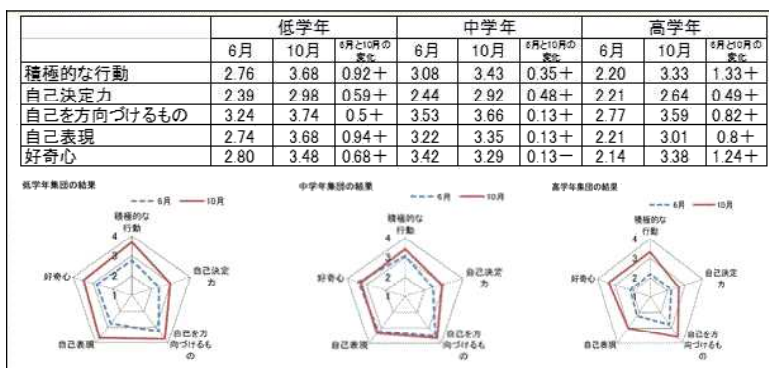


図2 主体性測定尺度6月・10月の比較

(4) 学校文化の形成（経営活動面における成果《学校文化の醸成》）

教員への意識調査の結果、本校の課題であった協働性に関わる項目で、顕著な高まりが確認できた。また、自由記述欄にも「学校全体が同じ方向を向いて進んでいる。」「児童の成長を喜び合うことができた。」など、教員同士の関係性の高まりを裏付ける記述が多く見られ、よりよい学校文化が醸成されたことがうかがえた。

2 成果及び課題

運動会をカリキュラム・マネジメントによる学校改善の中核に据え、取り組んだ結果、運動会後、授業中に発言したり、奉仕活動に積極的に取り組んだりする児童が増えるなど、日常生活の様々な場面で、児童が主体的に活動する姿が多く見られるようになり、他の教育活動への波及・効果も確認できた。また、学校文化においては、その後も多くの時間、児童の成長を語り合う教員の姿が見られ、課題を共通認識することが共に成長を実感することにつながり、個業的傾向の解消にも少なからず影響を及ぼすことが確認された。課題としては、新たなカリキュラムの作成は、多忙感や疲弊感を誘発したことである。しかし、運動会後の反省会議の中で、この運動会に関する一連のカリキュラムや次年度の運動会についても話し合われた。その中で、取組の大変さは認めつつも、児童の確かな成長を実感し次につながる取組であるとする意見や、次年度に更なる高まりを目指そうとする意見も出され、今後も継続することがまとめられた。このことは、この一連の取組に対するポジティブな見方が高まったことを意味している。つまり、多忙感が達成感に変容した事実を示唆しており、これはカリキュラム・マネジメントによる学校文化に関わる成果でもあると言える。今後も更に取組を継続、発展させ、「いい学校創り」を追求したい。

3 その他参考となる事項

五條市立阿太小学校Webページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/adasho/>